

### 13. 漱石の『こころ』がわからない？②

#### 「明治の精神」とは

それでは、「明治の精神」とはいったい何なのか？

乃木大将の殉死をきっかけにしているところから、「明治の精神」を、「国家主義」、「武士道」としてとらえる人が多いかもしれませんが、私はそうは思いません。私は、「明治の精神」と言うのは、一人一人が切磋琢磨しながら、新しいものを求め、変革をめざしていく「明治の気風」であると考えます。そこには自由な発想があり、模倣ではない個性があり、一人一人が「独立(インデペンデント)」しており、「個人主義」がある。幕末から明治維新にかけての人物が、今でも人々を引きつけるのは、生き生きとした、ものごとに捉われない個性をもっているからではないでしょうか。

そんな気風が、明治の45年間でどうなってしまったか？

日清・日露の戦争を経て、日本は台湾やサハリン南部、そしてさらには韓国(朝鮮)までも支配するようになってしまった。明治のめざした理想の国家はこんなものだったのだろうか。「明治の気風」、「明治の精神」は完全に失われ、残ったのは「国家主義」だけ！「国家主義」における人間は、国家権力から「模倣」を強制されることによって「独立」した個性を失われ、画一化されてしまいます。ついに、「明治」は死んだ！

#### 責任の取り方

それでは、「明治の精神」を死に追いやるような、そんな国家をつくり上げてきた責任は、いったい誰にあるのか？

伊藤博文にあるかもしれない。明治天皇や乃木大将にあるかもしれない。——しかし、みんな死んでしまった。それでは、生きている漱石自身に責任はなかったのだろうか。そう思った時、《御前は他人を批判する何の資格もない男だ》という声が聞こえてくるのです。

『こころ』の先生は、よく勉強し、知識もあり、考える力もあったけれど、社会の片隅で何の発言もしなかった。漱石自身も同様ではないだろうか。黙っているうちに、「国家主義」を大きくし、「明治の精神」を死に追いやってしまったのではないだろうか。自分にも責任があると感じた時、その責任の取り方として、「死んだ明治」に「殉死」するという生き方が出てくるのです。明治天皇に「殉死」した乃木と180度違った「殉死」。これが『こころ』の先生の「殉死」であると、私は思います。

「先生」の遺書の最後の段落には、《私の過去を善悪ともに他の参考に供する積りです》と書かれています。「二重構造」の表面である、下宿のお嬢さんと「先生」、そしてKをめぐる三角関係、Kの自殺にともなう「先生」の罪の意識では、他の参考に供するには無理がありそうです。

しかしながら、黙っているうちに、「国家主義」というものを生み出し、大きくしてしまった「明治」という歴史から多くの教訓を学び取り、「大正」という時代に生かして欲しい。「黙っていてはいけない。」「おかしいと思ったら声をあげよ。」「黙認は認めたことと同じ。自分自身、その責任をとらなければならない。」「——「先生」の遺書をこのようなメッセージとして受取るならば、それはまさに

「私」のような“ヤンガー・ジェネレーション”に対する素晴らしいメッセージとなり、百年後の私たちへのメッセージとしても大きな意味をもちます。

このような漱石の思いを、「二重構造」の表面で、さりげなく表現しています。妻の母が病気になる、到底治らないとわかったところです（下、54）。

私は力の及ぶかぎり懇切に看護をしてやりました。これは病人自身の為でもありますし、又愛する妻の為でもありましたが、もっと大きい意味からいうと、ついに人間の為でした。私はそれまでにも何かしたくて堪られなかったのだけれども、何もする事が出来ないの己を得ず懐手をしていたに違ありません。世間と切り離された私が、始めて自分から手を出して、幾分でも善い事をしたという自覚を得たのはこの時でした。私は罪滅しとでも名づけなければならない、一種の気分支配されていたのです。

『こころ』の先生も、一度だけ立ち上がったのです。妻の母のために。実際、漱石もこの後、学習院で若者を前に講演し、さらには選挙の応援と、「自分から手を出して」、声をあげていくようになります。

漱石が『こころ』に込めたメッセージを受取って、私はマルティン・ニーメラー（1892～1984年）の警句を思い出しました。『彼らが最初共産主義者を攻撃したとき』というものですが、さまざまなバージョンや訳があります。その一つを紹介します。

ナチスが共産主義者を攻撃したとき、私は自分が多少不安だったが、共産主義者でなかったから何もしなかった。

ついでナチスは社会主義者を攻撃したとき、私は前よりも不安だったが、社会主義者でなかったから何もしなかった。

ついで学校が、新聞が、ユダヤ人等々が攻撃された。私はずっと不安だったが、まだ何もしなかった。

ナチスはついに教会を攻撃した。私は牧師だったから行動した。――しかし、それは遅すぎた。

ニーメラーは芥川龍之介と同じ年の生まれです。漱石から見れば、まさに“ヤンガー・ジェネレーション”です。ニーメラーがドイツにおいて『こころ』を読み、漱石のメッセージをしっかりと受けとめることができたならば、ニーメラーは共産主義者が攻撃された時、行動していたでしょう。

## Kとは誰か

ところで、『こころ』の謎解きの最後に、「静」と並んで名前が出てくるKとは誰かについて、触れておきたいと思います。この作品で名前が出てくるのは、静とKの二人だけです。静に意味があるとしたら、当然Kにも意味があるはず。イニシャルKとは、いったい誰なのか。清沢満之説、石川啄木説、幸徳秋水説など、いくつかの説があります。

清沢満之は子規と漱石が尊敬し、大きな影響を受けた浄土真宗の僧侶です。Kの実家も新潟の真宗寺院であり、共通点はあります。

高橋源一郎氏などはKを石川啄木とする説を唱えています。啄木の本名は石川一。はじめ母カツは入籍しておらず、実家の工藤姓のまま。啄木も戸籍上は工藤一で

した。したがって、イニシャルはKになります。父石川一禎は曹洞宗ではありませんが、常光寺住職でした。つまり啄木は僧侶の息子であったのです。

いずれも捨てがたい説ですが、ここで作品の中に戻って、原点からKの正体を探ってみたいと思います。

Kは「先生」によって殺されたようなものでした。つまり、Kは乃木大将に殺されたようなものです。言い換えれば、「国家主義」に殺されたようなものです。Kというイニシャルで「国家主義」に殺された人物と言え、思いつくのは幸徳秋水。

漱石は大逆事件に関して、何も行動せず、何も語らず、何も書かず、ただ黙っていました。その結果、幸徳秋水らを見殺しにしていったのです。もちろん、客観的にみれば、危篤状態に陥った「修善寺の大患」を含むこの時期に、漱石が何か行動できるはずありません。けれども、どんなに言いわけができようとも、漱石は自分自身の良心に対して、許せない気持ちでいっぱいだったのでしょう。「Kはどのように自殺したのだろうか」という質問を聞いた時に「先生」が感じたと同様に、幸徳の死を思う時、漱石の《良心はその度にちくちく刺されるように》痛むのです。そして、《早く御前が殺したと白状してしまえという声を》聞くのです。「先生」がKを見殺しにした、ひょっとしたら「先生」自身がKを死に追いやったかもしれないと同様に、漱石は幸徳らを見殺しにしていった、そんな思いが強かったのではないのでしょうか。

幸徳のような犠牲者を二度と出したくない、そんな思いが『こころ』を書きあげていく原動力の底辺に流れていたのだと、私は思います。